

『万葉集』の教材本文―研究成果と教材化―

西 一 夫

一 はじめに

和歌の教材については、以前に高等学校国語科必修教科目「国語総合」での所載状況と本文の調査を行い、その結果を報告したことがある（拙稿「古典和歌教材研究―「国語総合」所載の万葉集・古今和歌集の活用―」「人文科教育研究」三二号、二〇〇五）。その後、平成二〇年に小中学校の学習指導要領が示され、翌年には高等学校の学習指導要領が公示された。この時、事項欄が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」と表現が大幅に改められた。新たに付加された「伝統的な言語文化」に求められているのは、日常生活の中には古典的な素材や発想が生き続けていることを知り、活用する力を身に付けるといふ側面がある。

「伝統的な言語文化」によって古典教材に対する注目が

集まるものの、教材には大きな変化がない。

本稿では、上記のような状況にある教科書所載の『万葉集』の本文が持つ研究成果と教材化の問題を取り上げて両者の有効な連携のあり方を探る。

二 教材本文の状況

中学校の国語科教科書において「伝統的な言語文化」の教材化は様々な工夫が行われている。その一つに光村図書があげられる。三学年全てに「季節のしおり」というページのコラムを設けて四季に関する詩歌や絵画、曆に関する言葉に拠って、四季それぞれの特色を示している。その中で今回検討するのは、第二学年の「季節のしおり秋」に続いて、「いろは歌」（古文・首説）と「七夕に思う―語り継がれ、読み継がれてきたもの」（古文・解説）の二つの教材が掲載されている。その解説教材に引用されている『万葉集』の七夕歌である。

解説文に示されている歌本文と訓、ならびに口語訳は以下のようである。

（本文）彦星と織女と今夜逢はむ 天の川門に波立
つなゆめ

（訓）ひこほしと たなばたつめと こよひあはむあ

まのかほとになみたつなゆめ

(口語訳) 彦星と織女星とが今夜会うという天の川の

渡り場に、波よ、荒く立つな、決して。

歌の訓には古典仮名遣いとなる部分には適宜現代仮名遣いがカタカナで示されている(こよひ↓こよい)。古文の原文での読解や文法を十分に学習していない生徒に対する配慮が見られる。このような教材の中で留意したいのは、本文と口語訳の関係である。古文作品の理解を深めたり、読み進めたりする際の補助的な役割を担っているのが口語訳と言える。このような関係から本文と口語訳とを見比べるならば、第三句本文「今夜逢はむ」に對する口語訳「今夜会う」との対応関係は検討が求められるよう。本文の「む」を「と」と口語訳するのは、婉曲の用法として認められ、文法的に逸脱は認められない(角川古語辞典、古語大辞典)。また、彦星と織女の出会いを私たちは想像するしかないのであるから、推量よりは婉曲と解釈するのが穏当であろう。ただし、「む」を婉曲と解する場合は多くは連体修飾となつて体言を修飾する点の問題となるのだが、口語訳は連体修飾として示されており、整合性が取れている。

このように見るならば、特段の問題はないと言えるのだが、『万葉集』の本文研究の状況とつきあわせた場合、

なお検討が求められる状況がある。

三 本文研究の状況

教材として示された歌の問題点は前章で指摘したように、本文と訓とでは特段に問題はないのであるが、第三句の漢字本文「今夜相」をどのように訓まれてきたのかを検証する必要がある、その点において本教材の問題がより明確化してくる。

『万葉集』の諸本の状況を理解する基本文献が『校本万葉集』(岩波書店)であることは言うまでもない。江戸期の寛永版本を底本として諸本の本文と訓を集成している。『校本万葉集』での訓は「コヨヒアハム」とあり、異同が示されていないことから旧訓は「コヨヒアハム」で会ったと考えられる。ただし、諸説として橘千蔭『万葉集略解』(寛永八(一七九六)年)では「コヨヒアフ」の訓があることを示す。同一歌の他歌集所載状況として示されているのは、「赤人集」(こよひあふ)「夫木和歌抄」(こよひあはむ)であつて、両訓で揺れがみられるものの、本文研究では、江戸期の諸注釈で「こよひあはむ」と訓むものが大多数であつたことが判明する。以降、『万葉集略解』の訓(こよひあふ)を採用するのは鹿持雅澄『万葉集古義』

(天保十(一八三九)年)であるのに対して近代に入って井上通泰『万葉集新考』が旧訓を支持している。その後は『万葉集略解』の「こよひあふ」の訓が採用され、近時の注釈で旧訓を採用するものはない。このような背景として漢字本文の状況が考慮されていると推察される。

牽牛 与織女 今夜相 天漢門 波立勿謹

特徴的なのは付属語の表記が比較的丁寧にされており、訓み添えは「彦星」と「天の川門に」程度と言える。ならば「今夜相」を「逢はふ」と助動詞を訓み添えるよりも「逢ふ」と訓むことが穏当だと判断される。

第三句を「今夜逢ふ」と訓んだ場合、第四句の「天の川門」との関係を検討する必要がある。教材では連体修飾で第四句にかかっているように解釈されていた。教科書では出典が示されておらず何に基づいた解釈を採用しているかは不明である。近時の注釈書の解釈を例示すると次のようになる。

① 彦星と織女星とが今夜逢ふ天の川の渡し場には浪が立つな。決して。(注釈・一九六二年)

② 彦星と織女星とが今夜逢う天の川の渡り場に波よ立つな決して。(古典全集・一九七三年)

③ 彦星と織女とが今宵逢う、その天の川の渡し場には、波よ、けっして立ってくれないな

(新潮日本古典集成・一九八〇年)

④ 彦星と織女とが今晩逢う天の川の渡し場に、波よ立つな。けっして。(中西万葉・一九八〇年)

⑤ 牽牛星と織女星とが今夜逢う、その天の川の渡り瀬に、波は決して立つなよ。(全注・一九八九年)

⑥ 彦星と織女星とが今夜逢う天の川の渡り場に波よ荒く立つな。(新編全集・一九九五年)

⑦ 彦星と織り姫とが今宵逢う、その天の川の渡し場には、波よ、荒々しく立たないでおくれ。けっして

(釈注・一九九六年)

⑧ 彦星と織女星とが今夜逢う天の川の渡り場に波よ決して立つな。(新大系・二〇〇〇年)

⑨ 牽牛と織女とが今夜、一年に一度の恋をつくすために逢う天の川の渡し場に、波よ、決して立たないよ(和歌文学大系3・二〇〇六年)

⑩ 牽牛星と織女星とが今夜逢う、その天の川の渡り瀬に波は決して立つなよ。(全歌講義・二〇〇九年)

⑪ 彦星と織女星とが今夜逢う天の川の渡し場に波よ決して立つな。(岩波文庫・二〇一四年)

約五十年の間に出版された主要な注釈を示したのだが、教材の口語訳と完全に一致するものはない。いずれも第三句を「今夜逢はむ」と訓む注釈はないのであって、

口語訳が一致することも基本的にはない。しかしながら第三・第四句の関係性は、連体修飾の関係で解釈されていると解して問題なからう（傍線部参照）。つまり、「今夜逢ふ」の「逢ふ」は連体形と理解できるのである。この点については、教材の解釈と同一の方向性にある。

また、第四・第五句の口語訳は、ほぼ語順に即して行われている。この訳文にほぼ対応するのは①②④⑦の四種である。

これらの状況から推測できることは、以下のような

①教材に採用された本文は近時の注釈書を参考にしているとは考えられない。

②口語訳についての本文と同様であるものの、解釈は現行の解釈と同様な内容となっている。

教材の本文は、ある程度の研究成果が反映されることが望ましい。しかしながら、従来の教材がそのまま用いられるなど、十分に反映されない場合が実際にはあるのである。このような研究成果と教材化との狭間を埋めてより良い教材本文を提供していくことも、文学研究の重要な役割と考える。

今回取り上げた教材は、読解するために示されたものではなく、伝統的な文化を紹介するための補助的な役割

であるのだが、やはり文学研究の成果をある程度受けた教材づくりが求められるだろう。

四 まとめ―教材と研究とをつなぐ―

『万葉集』の教材では、このようなことが生じる要素が他の古典教材に較べて大きい。その要因は、本来の本文が全て漢字で記されており、それをどのように訓むかが課題としてあるからである。その最たる例は、巻一の四八番歌である。詳細を述べる紙幅はないが、指導書などでも、この歌が孕む問題を指摘する例はほとんどない。現行の教材として示される訓みと旧訓とには、大きな乖離が存在する。そうした点を理解した教材研究が求められるだろう。この歌の解釈や研究史については、白石良夫『古語の謎―書き替えられる読みと意味』（中公新書・二〇一〇年）の第一章で丁寧に説かれている。

（にし かずお 信州大学教育学部）